

松葉教の二筋
二

特36

596

大日本教育書館

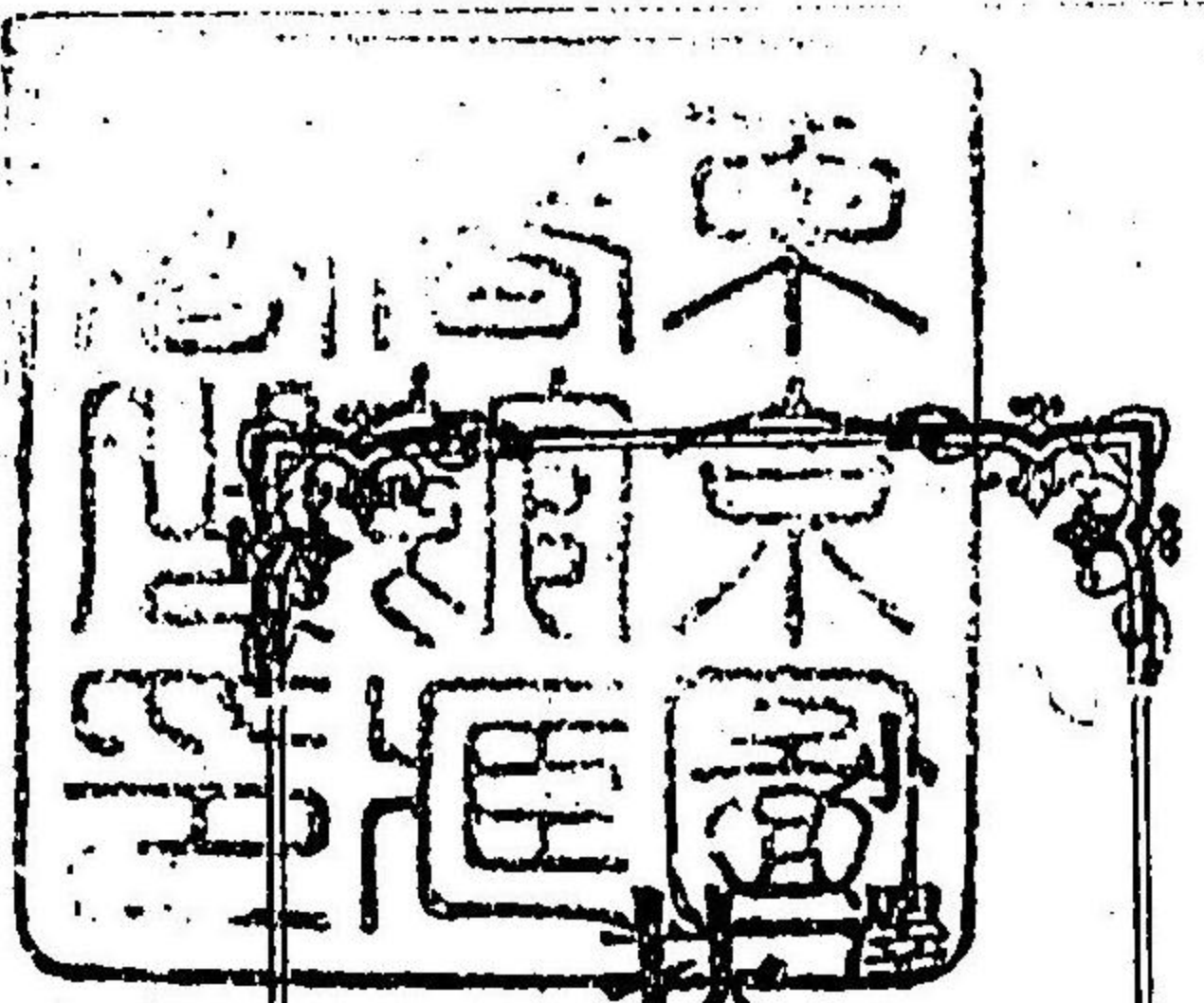
第四室

百
身
號

一	七	四
冊	号	架
		函

東
新
四一
二

松葉教の二筋



彦運著

扶桑教會道の一筋二篇



わすれても

親のあとふめ

ふまうて

五代目

青木正行

いづとなくおふせの如く

身祿やま

光をそへて

拜むあらたさ

食行二女

伊行まむ

眞筆田邊屯倉丸所持

天地と日月と親の

たふとさを

めけて入べき

道の一すぢ

權中講義田邊屯倉九

道の一すぢ二篇

權中講義小澤彦遲述

すつる身も世は安かれといのるなり

しつらならねばかくれかゝるなり

元祖角行尊師永祿三庚申年六月十五日ふ富士の御山よ

登り給ひて頂上よして天祖天神よ誓約なりて天の下

大に亂しとを歎きて上ハ 天皇様の叡慮を安し奉り下

ハ普く蒼生の憂を救ひ國家を富士の御山の安よ置んと

を奉祈て詠せ給ひなり身を捨て國を安くすべき眞の道

を開き天の下よ教の法を修行も世中穩ならば命を捨

させ給ひ死て身を隠し置べき地もなく靈魂は幽界に迷ふべしと歎き給ふ意ぞかし偕人生て其身を安し其業を勤め勵みて日夜天祖天神の恩頼に奉報り死て遺體を隠し置べき地を定め靈魂の天祖天神の御許に歸着て不放奉仕るべき理を御傳なる大我とハ申なり既に前篇に述し天祖天神の本教を神習ひつゝ人々道を直く修行をして死て後其功業の現世より高く貴きんて幽界の神等乃御罰もなく靈魂の天に歸着り理を明に悟り得ぞ眞の人物一躰は大きな我と申すと成り其大我たる修行を精究め發明る場ハ富士の御山ぞろし往昔享保十五庚戌年冬

の末食行身祿尊師の御許に一人の翁訪來れり小石川郷は商物業扱なす松野屋善兵衛と申す者なるが常陸國水戸領松野村に生れて十七歳の時江戸より來り稼の業に携みなく經營立て身は不自由をなく父母も古郷より迎へ來て老を養ひ年へて兩親も死て最早三十三回は息過て本年六十六歳と成り今ハ身の安穩を願の外なし然るに幼少と成りより別段佛の冥利はと成り恭なしと思て是只眼乃あたり難有と思ふは日月様計りと存じて朝夕は仰ぎ拜み奉りぬ其御恩ハ廣大にして實は味の程を悟り得ぞ世の物識と言ふ儒者も問ひ三界を悟る僧にも聞

き申ど唯難有と聞せらるまでにて其味の甘きか辛きかを
審詳ふ説き諭し給ふ者なし此ころ聞尊師ハ富士比行者
にして天祖天神と日月様の御徳を貴み明め其恩頼の忝
なきを奉報の道を弟子等に教へ諭し給ふと聞一向ふう
れしきとに思ひて訪來れり愚なる心の迷ひを明し難有
味を細詳に説き示し給へと懇に涙を流し申せば師も又
涙を流し好きとを問るゝを比哉我多年教法を修行て翁
の尋ね給ふ道理を詳よ極め粗其味も發明たり然れども
尋常の心以説き諭すべきよ非ぞ我修行場なる富士の御
山ふ詣て給へ彼御山よして顯然に其難有き次第を見極

てその味をこそ説き申べしと諭せしかば翁も其周旋に
依て翌十六亥年六月十四日師よ透引れて御山よ詣て登
りて其夜ハ七合五勺目鳥帽子岩なる水賣十郎右衛門が
室に入て休息て夜半過るところ室を立出九合五勺目日御
子御前に至り師ハ翁を顧て申さく此場こそ去年説き置
し我多年教法を修行場なりと共よ清砂の上よ坐て御山
の頂上に向てふし拜み又西に傾ける月を拜み終て後今
ぞ翁の多年の迷ひを説き大我と言ふとを諭すべし熟熟
世界の形を見放し給へ如此天の大なる地の廣き山も海
を殘る處なく覆ひ載て雲行雨施し陰陽節あり萬物蕃殖

るの中に其氣を受けて同じからん人倫あり鳥獸虫魚あり
草木あり皆共に神授の靈魂にして天地の間に養れ雨露
の御恩にあづかると人の子を養ふ惠と異なることなし
是則ち天祖天神の恩頼より成り成るなり實に神心の難
有ぞ元祖角行尊師の安全十方眼前門万精光明と發明め
し理ぞ如此天地の間氣象全效れて四方四隅上下共に開
けしを眼前天門より見れば万物悉く精氣をとらし露を
結び月の光を含まる是謂也又暫く東方に向て拜み給へば
漸ありて日ハ波の上に浮み上る山川麗なり是風日風來
威徳相生日發明められし理ぞ日の出ふより陽氣行れ朝

風の吹來れるまに日ヒの嚴なる御徳加り万物大御影
をうけて照育の忝なき恩頼を冠る是謂也人の生るゝも
又此理よして天祖天神の結びの靈魂をうけ父母の和合
に形をなすハ天地の開け萬物の成れる神理と一躰なり
是一念生佐志空生と發明められし理ぞ天祖天神の顯れ
給ふの始め大空に一物なりて萌しを含ま意にして眞の
一念ハ天より結び下し授け給ひ現世に生れ出て天祖天
神の本教に直く志し日月の御恩に業立るは是謂也今見
る萬物の様と理りひとし其難有味をなく心に悟りて甘
さう辛さかを知べしと説き終て詠せ給ひける

富士の山ほのく明すよるづ代の

道のこゝろもみねのしらゆき

歌の意はふじの頂上ふして夜はほのぼのと明渡り一時
の間に世中を明ふ見放すハ天祖天神の御徳もて天地共
に開け萬物の形悉く備る遠き神代の開け初る様を今見
るが如し万物成り成て蕃殖も人に教育の道有る御山の
峯の高く貴く降れける雪ハ消る時なきの類と同じと詠
せ給ふ也翁ハ此御傳に始て迷ひの道を開き神理の明き
きを悟て神人一物一躰の大我と言の理を辨へ其味の心
にしみて今より後蕃神の横さなる教に迷ひなく修行な

し死て靈魂は長く天祖天神は御許ふ奉仕て國家は爲に
炳然き功德も顯し世中は守護神とも成べしと厚く一禮
なして共に又頂上よよぢ登り報恩の御禮を割石御前よ
勤めて三日食をたつと書傳へ置れしは天祖天神は本教
よして高天原よして万代は法の極と立られし甚貴き道
の一筋ぬれど末世の今となりては本教たる眞の御傳の
道を修行み發明る社徒稀にして所謂舊神道者の祈禱又
は修驗者の咒咀加持等の類ひよ染て拙き教となすしを
教長穴野權少教止いたく歎きて遠く元祖の遺風を探り
今の教の醜き態を盡く改め正し廣く國國の社中よ布教

る眞まことの法りを世々よ悖行たがひなく修行しゆぎん勤つとめて國家くにのため天あめの下した
安穩やすんを祈いのり奉まうて天祖あめのむすこ天神あめのかみの恩めぐみ頼たのみに浴あびし死しなて靈魂たましひの天あめに
歸かへり着つ安寧やすんを得うる神理かみを深ふか發明あきらめむべし

御恩禮詞

高天たかあまの神かみ魯ろ神かみ魯ろ岐き神かみ魯ろ美み奇き靈魂たましひ坂さか幸さい倍ばい給たま倍ばい

明治十年八月七日御届

編輯兼出版人

山梨縣平民

小澤彦遲

甲斐國都留郡福地村住

權中講義小澤彦遲著

扶桑教會道一筋三篇

定價二錢五厘

食行身祿

一すぢの眞の道と尋來て

今日あらたなる

富士を見るかき

權少教正穴野半

御中ぬし神のみことこの

ましてこそ

百ち萬の神もましけ禮

道の一すぢ三篇

權中講義小澤彦遲述

元祖の御傳は陰陽和合天下人倫潤國土王とは陰陽の二氣和合して天の下の人倫を潤す皇國こそ大祖參神の造り初し國に志て國土の王國ぞ陰陽は二氣を大祖參神の大元息にして皇國か其大根で有ぞ此氣の秀て富士山とはなれり故に御山にて風を大元息と云御山より起て天の下の萬物を潤し養育て其所賦の性を盡させて悉く其業に功を顯示し罔極の恩頼に報て神心に乖戻ぬ道ある事そ先天の精靈を下し覆地の萬物を生み載る山の禽獸

草木金石を出し雲雨を起し海の魚鼈珠玉貝璽を出し河
水を入る禽獸魚虫は生れて性の率ゆる業あり鶯の春を
報げ螢の夏を照し鹿の秋を呼び鰻の冬に群る木に栖は
風を知り穴に住は雨を知り肉は人體を肥し羽草は國用
となる草木は花の目を慰あり實の飢を助るあり草は屋
を葺き木は家よ造るが如き其生育の恩頼に報る道ある
事にて況人は萬物に勝をし魂を稟萬物に勝をし體をな
して産れ生て現世に有ん限りハ萬物乃盡す業をんて其
身の保護とせれば宜く知識を開き爲人道を修行へし死
してハ神世の御制に依り魂ハ大祖參神の御許に歸りて

冥府に座神等と諸共に並居て其子孫等の春秋をりをり
の祭り物を受諾て諸神にも耻る事なく現世に存し時の
大功德を輝し翔天翔國て不窮の冥護を顯示そ万物に長
たる魂を稟しと云べし借魂ハ毎度申す我教の心白生我
と御傳の通り其物がらば靈に志て少も曇りなく洞ぬけ
て障る者なく晝も夜もきらきらと志て血肉と和合志
て休息迄活用きて有ぞ借かく心の白く靈なるを賦與て
人と生れ惡逆者となるは何ごとぞや是神道の自然に順
べき教の甚も貴き道筋あるに中古外國より横道の傳り
來志より其邪に導き迷ひ誑かそきし人出來て終に本心

の善を害ひ破るゝ至れり譬て論ば人の身體ハ氣血全く
調て素より健康なるゝ四季の氣候の違ひある時外邪氣
に侵さる終に健康を害ひ惡熱發起りて百病の根本とな
り甚きハ死に至るあり其災最大なり佛道ハ空言を以
人心を誑し西教ハ性の元惡を述人倫を亂る如く總て神
授志本心に悖り神道の質朴なる教を害ひ破りて元惡な
る横道に惑へるぞ實に慨はしく悲きに非や偕其神授志
本心の善なる確手の證據判然なるを知むとせば我富士
山に登り試むべし御山ハ國土の眞心に志て往昔より中
央を天地の境と言つぎ語つぎ志如く五合目より上は天

に接きて悉く清らなる砂に志て塵芥なく常に大祖參神
を初め奉り八百万神の遊萃り給ふ御處にて自然氣候も
現世と異にして大元息坂天の下に吹き及し人倫を潤と
大根なれば此氣に逢てハ人心外邪に侵さる元惡も染たる
も本心の善に歸るが故に登山數千人群集の時或ハ登る
有或ハ下る有岩牙の峻しき道も互に讓り知と不知と剛
きハ弱きを若きハ老を扶助て親み厚く甚窄き石室の内
に男女間居休息ても却て困窘在或ハ手を首に振つけ或
ハ蹂躪らきて咎め怒る者もなく争ひ罵る者もなく一向
に慈悲堪忍情不足中道の御傳を主と守り皆神心の正し

く和きて染悪に離れ本心の善に歸り頂上よ攀上てハ元
祖の御修行なされし天拜式を勤めて大祖參神に人ど産
れし恩頼に報い奉て人も神も一心一體の理の炳然をし
る事にて角行尊師の白糸の瀧よて御修行の時詠し歌に
夜もすあら嵐に瀧ハ碎て落玉とに宿る月かげ
夜の嵐よ瀧水の吹亂されて碎る如く人心外邪にひかそ
れて苦惱よ亂るも神道の直く正志きに不悖ときハ本心
乃善に歸ることと碎け落る玉水に月影の宿る如く神の導
き守ると云歌意ぞ抑我教の神道ハ大祖參神の賦し所を
養存しめ生し所を愛教て真心を害ふ事なく萬物の性の

率て盡すべき業の道を保持死すれば必本原に歸らとめ
現世も冥府も教化の至り及ぬ所なく或は人知ざして國
家の政刑及ぬ所を過ち犯し不意神明を汚穢が如き死後
罰の脱がたきを救ひ助ん爲よ朝廷よて年に二季大祓式
の御制ありて悉く其罪を解除ふより彼の西教祖の十字
架よ釘うたれて人の罪を神よ償ふ如く醜き狀の禍害は
無そ偕吾も人も國土の王たる日本國に生れ難有神道
一筋よ世々悖行なく貴み敬ひ本原に報い奉る神理を發
明とて然後ハ外教の横道も粗其味を知べと偕慷慨ハ人
情の愚なるぞ物に觸てハ美惡となく移り安く流を安と

外教を習ひて其味をいするは醫祖の諸草を味ひ其薬と毒
とを覺る如く人に薬となり毒となるを覺りて惡を去り
善を取て身を脩め家を齊る補益となし神道の貴き高き
理を擴充ば無上神心と云べきふ此近頃は彼が教を學び
其毒比元惡に染著終に本心まで奪れ剩へ其毒を他人ふ
施し惑しむるに至る是狐狸の人と變化或は怪異なる状
なり人を惑し害ふ有その變化術は狐狸比情を習ひ得ぬ
ば障碍の術を覺りがたし既に彼の術を習ひ覺り人を誑
す害を防ぐ方法となるべきに終に己れ狐狸となりて人
を變化し害ふたぐひ今の世は多し可歎に非すや如此人

等まで我教に熟々諭と導て大祖參神の大元息を稟國土
の王國に生れ人倫の教の法に身を潤す神道の恩頼の深
く厚きに報い奉る元祖御傳の眞の一筋を直く正しく修
行とむべし

明治十一年の夏富士山の頂上に在しに八月なかば頃よ
り内院におのづから神燈のいとあかくあがる夜のある
を見て

神もまた神に仕ふる燈火の影くらうらぬ道を見る哉

一等講師 磯稻綺朮

第四編より後の卷にハ元祖角行尊師を初として六世まで世々の尊師の略年表を記すべし

明治十二年七月十五日御届

山梨縣平民

編輯兼出版人

小澤彦 遅

甲斐國南都留郡福地村住
二百三番地居住

